

「廃墟」としての大学で生きること

——国家イデオロギー装置と脱出の回路——

番匠健一

はじめに—「廃墟」のなかの肉体

萬國尚我馬 ドコモカシコモイクサノサカリ
故園今秦何 オレガ在所ハイマドウチャヤラ
昔飯相識少 ムカシ歸ッタトキニサヘ
蚤巳戰場多 ズキブン馴染ガ撃タレタサウナ

杜甫「復愁」（井伏鱒二『井伏鱒二全詩集』岩波文庫，2004年）

両目をつぶった仏像がところ狭しと並ぶ本堂。天井近くに吊られた額縁のなかから白い蛇が凝視するのは、添い寝する女とその剥き出しになった太ももをゆっくりと撫でる住職の姿。部屋の正面に広げられた屏風にあるのは、黒々とした炭で書かれた杜甫の詩とその現代語訳である。女の夫は大陸戦線からかくも生きて帰るが、その存在はかつての人間としてのそれではなく、家族によって土間に打ちつけられた木杭の牢のなかで這いまわる蛇と化していた。銃弾の飛び交う戦地で赤茶けた土のうえを這いまわった兵士の肉体は、復員後の内地において家畜を食らい畑を荒らす蛇以上でも以下でもなかった。これは立命館大学国際関係学部の講義で見た『11'09'01/ セプテンバー 11』に収められている今村昌平の遺作短編映画『おとなしい日本人』¹⁾の一幕である。この講義の担当者であった西川長夫は、頻繁に言葉に詰まりながら、時には表情をゆがめ、時には大きく憤りながら、言葉にならない言葉を自分のなかに溜め込んでいくかのように授業を進めていた。

世界の富の象徴たる二つのビルが崩れ落ち、はるか遠くの土地にミサイルの雨が降り注いだ一連の出来事は、大学で日常生活を続ける学生にとって世紀末騒動の延長のようなものでしかなかったかもしれないが、講義をしながら咳き込む目の前の老人にとっては「既視感」と「予感」が混じった自分の奥底にうごめく苦々しい経験の蓋を開けるものであったに違いない。ネズミを口に啞え、藪のなかに分け入る帰還兵の肉体のうごめきは、この苦々しい経験を刺激するものであっただろう。武田泰淳、田村泰次郎、石川淳、坂口安吾などの文学を同時代の自らの問題として読み、論じてきたものにとって、戦後文学における「肉体」は廃墟を知覚する器官であり、矛盾を抱え込んだ自身の最後の拠点でもあるようなものとして発見される²⁾。テレビ画面で何度も繰り返され皮肉にも「グランド・ゼロ」と名付けられた廃墟の誕生の瞬間は、大学という場所そのものが持つ問題と結びつくのではないだろうか。

1. 大学という「廃墟」：ウォーラステインの社会科学批判と国民国家論

戦後日本という時空間のなかで大学を射程にとらえ議論するためには、単純にはいかないプロセスが必要である。国民国家批判の理論的な枠組みのなかでも特に学校、大学にかかわる問題としてL・アルチュセールの「国家イデオロギー論」からの影響は繰り返し論じられてきた。ここでは、大学の生産する知の問題にひきつける形で、アルチュセールと並んで国民国家批判に影響を与えたウォーラステインの社会科学批判を取りあげたい。

ウォーラステインは、社会科学の構造変革に向けた4つの論点を提出するなかで、とりわけ「国家を唯一の可能のおよび／あるいは第一義的な境界線と考えることを拒否」する姿勢を強調している³⁾。そしてウォーラステインの社会科学批判を受けた西川は以下のように述べる。

「ウォーラステインの社会科学論をいささか強引に要約すれば、19世紀から20世紀にかけて形成された諸社会科学は、いずれも国家の制度として国家を維持することを最終目的としており、それぞれの形でのナショナリズムの表明である。またウォーラステインは、19世紀に誕生した社会科学はそれが制度化される過程で、法則定立的科学（経済学、政治学、社会学）と個性記述的科学（歴史学）に分断され、さらに人類学と地域学がこれに加わるという図式を提示しているが、これらの諸学（ディシプリン）の区別はイデオロギー的便宜的（制度上の）なものであって内的科学的必然性はなく（したがってその上に設定されるインターディシプリナリーも虚偽的なイデオロギーである）、それらを統合した唯一の「史的社会科学」のみが構想されるべきであると説く。」

西川長夫「戦後社会思想の転換」『国民国家論の射程』柏書房、1998年、pp.252-253

ウォーラステインの議論をうけた西川の言葉は、1988年に設置された国際関係学部への自身のかかわりから発せられたものだろう。ここで「虚偽的なイデオロギー」として批判されている「インターディシプリン」は国際関係学部におけるマジックワードのようなもので、冷戦の崩壊とともに国民国家の衰退が共通理解として唱えられ、非国家アクターとしてのNGOの登場と国家を超える枠組みとしての国連とEUなどが注目され論じられていた。この西川の一文には、国民国家のもとで形成された学問体系を自覚し、大学という場所を問題化することなしに、非国家アクターを称揚することへの怒りのようなものが読みとれる。しかし、この批判は国際関係学部設立時から関わる西川にも返ってくる。学知がもつ「虚偽的なイデオロギー」を指摘しながらも、その「虚偽」に満ちた大学のなかで生きることをいかなる問いに結びつけばよいのか。

ここではビル・レディングズの提起にならい、「虚偽的なイデオロギー」のなかにある大学を「廃墟」として捉えることから始めたい。レディングズは、大学が持っていた啓蒙のプロジェクトはもはやその役割を果たしていないと主張する。

「国民国家は、もはや世界資本の再生産の主な事例ではないので、「文化」——国民国家が追求した統合という事業に対する象徴的政治的対応物として——は、需要を失ったと、本

書は主張する。国民国家と文化という近代の概念は、同時に発生したのであり、それらは、私の主張では、ますます超国家的に広がるグローバルな経済において重要ではなくなってきているのである。このシフトは、大学にとっては重要な意味を持つ。なぜなら、大学は、歴史的に、近代の国民国家における国民文化の主要な機関であったからである。」ビル・レディングズ『廃墟の中の大学』法政大学出版局、2000年、pp.16-17

レディングズがいうように「大学は、啓蒙運動の遺産であった人文科学のための歴史的事業、すなわち文化という歴史的事業にもはや参加してはいない」⁴⁾とまで言い切ることは、いささか早計かもしれない。いうなれば、今日の日本の大学において、講義や「学問の」ゼミナールではなく大学の就職活動支援のゼミナールにおいて要求される礼儀作法や言語能力、身だしなみ、そして自己実現の強迫観念は「文化的」な要素を多分に含んでいる。さらに企業の自己啓発セミナーでの身体と精神の両方の規律にかかわる「文化的な」形態は、近代日本における「修養」（この用語も「文化」、「教養」とならぶ Culture の訳語である）の流れを色濃く受け継いでいる。しかし、大学内での教育を通じた「陶冶」（自己の完成）という大学の存在意義の一つが黄昏を迎えているのは事実である。ここでは「虚偽」であることが暴かれているイデオロギーのもとで、あたかもその物語が崩壊を踏みとどまっているかのように振る舞うという矛盾に満ちた文化の「廃墟」における作法が要求される。

2. 国家のイデオロギー装置としての「文化」・「教養」：土曜講座と立命館民主主義

この「廃墟」としての大学を考えるためには、大学がたどった歴史的なプロセスを見直す作業が必要である。ここでは90年代後半に出版された『立命館土曜講座50年史』を材料に考えてみたい。1991年の大学設置基準における一般教育と専門教育の区別の廃止をうけて、1997年までにはほとんどの国立大学において教養学部が廃止される。一方で、私立大学においても教養科目の問題は盛んに論じられ、『立命館土曜講座50年史』はそうした「教養の危機」の状況のなかで編まれたものである。

土曜講座とは、滝川事件で大学を辞職した末川博が戦後立命館の学長に就任した際、1946年3月に「平和と民主主義」という教学理念のもとで始めた大学の民主化の一環であり、いわゆる「立命館民主主義」の象徴の一つである。末川博によると、戦後の再出発にあたり大学とは「孤立した教育機関」ではなく「大衆とともに歩く、大衆とともに考える、大衆と共に学ぶという組織」でなければならなかった⁵⁾。『土曜講座50年史』にも採録されている1973年4月21日に行われた末川博の最終講演「大学における本質的なもの」にも以下のような記述がある。

「私が20年の11月にここへ来て、その翌年の3月に始めたんです。毎週土曜日の昼から2時、立命館に行ったら何か話があるということにする。PRということはPublic Relation、社会と大学を結びつけなければいけない。大学というものを象牙の塔というように社会から隔離した、離れたものとするのは私はいかんと思っている。大学で研究したり、いろんな調査をしたりしたことは、できるだけ市民にも公表する。」末川博「大学における本質的な

もの』、立命館土曜講座50年史編集委員会『立命館土曜講座50年史』立命館大学人文科学研究所、1997年、p.126

こうして毎週土曜日には、大学のキャンパス内で人々が「自由に」講義が聞くことが可能な公開講座が開設されることになった。この語りにおいては、戦前の「古い体制」のもとにあって「軍国主義的」だったものを改めることに力点が置かれている。今日にいたる立命館の「平和と民主主義」の歴史において、「軍国主義」の否定は独自の強いニュアンスを含んでいる。戦時期の立命館を象徴する禁衛軍は否定の対象であり、樺太庁の長官であった立命館総長中川小十郎の評価や現在の衣笠キャンパスに存在し戦後の理工学部となった立命館日満高等工学校など、大学の知とコロニアリズムの切迫した関係は未だ批判的検討が不十分のように思う⁶⁾。

末川は戦後の立命館大学の「民主化」に基礎においたうえで、大学の役割を以下のように述べる。

「とにかくわれわれが大学の本質的なものとして学問する。そして学問の上に立って、学問を通して自分を磨くというところに大学の本質があると考えているわけです。」末川博、同上、p.139

ここでは、近代国家における大学の役割を引き継ぐ形で大学の本質的な意味を「学問」(知の生産)と「自分を磨く」(自己の陶冶)の2点においている。戦後の再出発にあたり、大学の「民主化」とは、戦時期に失われてしまった近代における大学の「本質」を取り戻すことにあった。大学で生産される「知」は、「市民」に公表されねばならず、「市民」との関係において大学を意味づける必要があった。「社会を大学に結びつけなければならない」という言明はここにかかっている。このような「知」と「陶冶」、「大学」と「社会」を結びつける前提となる概念は「教養」といって差支えないだろう。そしてレディングズがドイツ観念論者の大学論をまとめながら端的に述べているように、この意味での「教養」は「国民文化」でもあった⁷⁾。「知の生産」と「自己の陶冶」を大学の基本目的として確認しながら、教授会・学生が協力して「外部」からの圧力に対抗する体制が「大学自治」とされた。

これに対して、同『立命館土曜講座50年史』の西川長夫の論考では、むしろ「文化」や「教養」の概念を通して戦後50年たつてなお戦時期とひとつながりになった大学の姿が、畏怖をこめて思い起こされている。

「ドイツ的な文化概念がアメリカ型の教育改革と文化概念に結びつくような形で、戦後の改革が行われました。……。これは土曜講座に対する私自身の反省にもなるのですが、そういうことをわれわれの土曜講座もあまり考えてこなかったのではないかと。戦争を批判する。戦争中の軍国主義を批判する。そういう形で戦後が出発します。ところが、戦前戦中を支えていたある種の価値観、教養主義や文化理論といったものも同時に受け入れてしまった。戦後デモクラシーと言うけれども、「文化」と「体育」と「国家」は戦後も変わらなかった。文化の概念が変わらなかったということは、戦争中の国粹主義も教養主義も払拭できなかつ

たということです。つまり、そういうイデオロギーと言いますか、思想の構造が反省されないで受け継がれたということです。……。国家というものはそういう文化、イデオロギー的なものとわれわれの肉体そのものをコントロールすることによって成り立つ。その根本的なものが戦後も維持されてきたということ示しているのではないかと思います。」西川長夫「現代における市民的教養と土曜講座」、立命館土曜講座50年史編集委員会『立命館土曜講座50年史』立命館大学人文科学研究所、1997年、pp.116-117

ドイツ語の *Kultur* であれ英語の *culture* であれ、その訳語である「文化」及び「教養」は、「文明」に比べて精神的な人格形成など限られた領域をあらわす言葉である。しかし国民国家の形成というプロジェクトにおいて、「文化」は強力な国家のイデオロギーとして機能する。そして「国民文化」の形成にかかわるのが、国家のイデオロギー装置としての大学である。この西川の言葉には、戦時体制を支えていた「文化」「教養」の概念が大学のなかで変わることなく戦後に持ち越されたことに対する疑念と、その大学のなかで生きてきた「私自身」への反省が込められている。そして大学という制度のなかに戦後の廃墟と同じく「肉体」の問題を持ちこむことが西川にとって大学という場所で／から国民国家を問うことにつながる。

「結局は国家を支えるために中心的なイデオロギーを供給してきた文化や教養というものを、改めて問題にしなければならないだろうと思います。したがって、そうしたものの背後にある現在の国民国家というものの批判的な考察をもう少し深めていく必要があるのではないかと思います。もし「地球市民」ということを言うのであれば、国民国家を前提とした市民や教養という概念は、それと根本的に矛盾するはずです。市民や教養の概念を根本的に変えていかなければならないだろうと思います。これからの土曜講座というのは、そういう教養や市民の概念を変えていくための努力をする、一種のフォーラムと言いますか、そういう変革の場になるべきではないか。これはいままでの土曜講座に少しは関わってきた者としての反省の言葉でもあります。そうすると、今度は土曜講座の「講座」という文字が気になります。こんなに高い所でしゃべっていて、たいへん居心地の悪い思いをしているのですが、こういう形態のものを続けていいのかどうか。前の末川先生のレジメには、「フォーラムとしての講座、講師との交流」ということが書かれていて、そういうことが必要だと思います。」西川、前掲、p.120

「教育の危機」、そして「大学の危機」が繰り返し提起され、関係者によって問題領域と自己解決の筋道が定められているかのように論じられる。このように「新たな文化」、「新たな教養」、「新たな知」という形容詞のみとりつけた言葉を創り出すことによって大学改革を論じるのではなく、その背後にある「現在の国民国家」との関係性を考察するという言葉が土曜講座の場所において投げかけられた意味は大きいように思う。「教養」や「文化」概念を捉えかえすことなしに大学の危機を議論し、あらたな代案を生み出し続けていくことは、国家のイデオロギー装置が作りださず「危機」と「国家への回帰」という循環のサイクルに飲まれることになる。では「教養」や「市民」のための公開講座はどのようになっていくのだろうか。

3. 私立大学における可能性？

大学が近代国家のもとで担っていた役割の行方について考えた場合、立命館大学ほど適した例はないだろう。ここでは1999年に立命館総長・立命館大学長に就任し、2007年には学校法人立命館の理事長に就任した長田豊臣氏の大学論を取り上げてみたい。大学経営の中心で大学改革を進める長田氏と、研究者として文字を世に送り続けた西川は一見対照的に見えるが、両者を取りあげることによって見えてくる西川の一側面がある。

「わが国の国立大学の最大の問題点は、明治以来の旧帝大を中心とする縦割りの特権的序列構造にあぐらをかき、研究資金、研究者、成績上位の学生を独占し、排他的、独善的インブリーディング（同系交配）を繰り返す、それが学問の独立であり、大学の自治であるとうそぶいてきたことであろう。いま、わが国の高等教育再生のためにもっとも必要なことは、このような旧帝国大学を中心とする特権的縦割り構造にメスを入れ、国立大学での人事、学生構成における思い切った均質性の排除と多様化、外部への門戸開放と流動性の促進を図り、真の意味での競争原理を導入することであろう。創造性は多様性と流動性の保障のもとでのみ生まれてくることは、アメリカの例をあげるまでもなく、いまや世界の常識となっている。さらには、わが国の高等教育再生のためには、大学生の8割近くの教育を現実に取り受けている私立大学の経験と実践をどう高等教育制度再編の仕組みのなかに組み入れていくのかという視点が不可欠なものとなろう。グローバル化の波は、大学を学園から企業に、学生を消費者に変えつつある。そのなかで大学はいかなる機能を持ち、いかなる形態をとりうるか。グローバリゼーションの認識と批判の拠点であると同時に、未来につながる創造的共同体としての大学の可能性が問われている。」長田豊臣「日本の大学」、西川長夫他編『グローバル化を読み解く 88のキーワード』平凡社、2003年、p.216

この引用からは、前節で引用した末川博の大学論と同じく「国立大学」への批判的評価にくらべて「私立大学」の教育機能に重きを置く論だということがわかる。長田氏の私立大学論は、「官」主導で市民の自発性が発揮できない「官僚国家」を日本社会の最大の問題とし、教育の現場において「官」主導の国立大学中心主義からの解放と私立大学の可能性を主張するものである⁸⁾。そして、「真の意味での競争原理を導入する」という言葉の内実は単純ではないが、立命館大学でここ15年ほどに起った大学改革の理念を端的に要約してくれている⁹⁾。

「我が畏敬する友西川長夫さんの定年の報を聞いて感無量である。西川さんと私はここ30年間文字どおり青春を共にしてきた。最初に彼の名前を知ったのは大学紛争の頃であった。当時われわれは荒れる学園で体をはって頑張っていた。下手をすると急進派学生の言うとおり大学は解体してしまうのではないかと、そうしてはならじと、必死になっていた。そういった騒ぎのなかで当時かなり影響力のある総合雑誌「展望」にフランス留学中の仏文学者がカルチュラタンの学生反乱についてレポートを執筆した。そのレポートそのものは良質なものであったが、日本で苦勞しているわれわれにとって、そのレポートはあまりにも評論

家的に見え、許しがたいものと写った。しかも、その執筆者が立命館の専任教員であることを知ってわれわれは文字どおり怒り心頭に発し、帰ってきたらただではすませないぞと息巻いた。その仏文学者こそが若き日の西川長夫であった。その後どういう経緯があったかよくは記憶していないが、気が付いたらすっかり仲良くなっており、週に2、3度は5～6人の文学部の仲間と一緒にフランス料理の食べ歩きを楽しんでいた。立命館育ちの私にとって他大学から来た西川さん達は、新鮮であった。なかでも西川さんは特に優秀であった。じっくりと粘り強く、自分の頭で考えるタイプであった。恐らく京大の良い意味での伝統に連なる人であろう。」長田豊臣「畏友西川長夫教授の御定年を祝って」『立命館国際研究』12巻3号、1999年、xvii

学園闘争のさなか文学部助手として生徒と相対する側にいた長田氏の立場性が良く現われた文章である。対して、西川は当時フランスに留学しており、教員であり留学生でもある「ニセ学生」という立場からパリの68年を経験している¹⁰⁾。

「長田さんが総長になってからでは、『グローバル化を読み解く88のキーワード』（平凡社、2003年）に「日本の大学」という項目で書いてもらった。多忙な中でそんな時間はないことは分かっていたが、事は大学問題であり、ここで世界的な視野に立って大学総長としての見識を披露して欲しかったのだ。それに大学論は、68、9年の大学紛争時代に、われわれが熱中し、真剣になって論じたテーマであった。それで私は最近翻訳が出たビル・レディングズの『廃墟のなかの大学』やウォーラステインの大学論などいくつかの参考文献を渡して執筆をお願いした。長田さんが苦勞してこの5枚半ほどの原稿を書いてくれたことには感謝している。だが正直言ってこれは少し過大な期待であったようだ。届けられた原稿には、国立大学に対して大学生の大部分を占める私立大学の重要性を説く、長田さんの持論以外にこれといった新しい観点は見当たらなかった。このままで載せるわけにはいかないので私は大幅に手を入れることにした。例えば最後の結論の部分である。「さらには、わが国の高等教育再生のためには、大学生の8割近くの教育を現実に引き受けている私立大学の経験と実践をどう高等教育制度再編の仕組みのなかに組み入れていくのかという視点が不可欠なものとなろう。グローバル化の波は、大学を学園から企業に、学生を消費者に変わりつつある。そのなかで大学はいかなる機能を持ち、いかなる形態をとりうるか。グローバル化の認識と批判の拠点であると同時に、未来につながる創造的共同体としての大学の可能性が問われている。」——お分かりのように右の文章の前半は長田さんの文章であり、後半は私が勝手に追加したものである。おそらく総長としての長田さんの意に反しているのでここに公表し、罪は西川にあることを認めておきたい。長田さんに無理矢理書かせてしまった文章を読みながら、私は大学総長とは、いかなるものであり、その地位にある人をいかに変えるかについて改めて考えさせられた。」西川長夫「畏友長田豊臣教授の総長御退職を祝って」『立命館文学』597号、2007年、pp.379-380

この文章を読んだ時は衝撃であった。いつも道理の通らないことに対しては、他人に対しても、

なにより自分に対しても非常に厳しい西川先生がいったいどうしてこんな誤魔化しをしたのだろうか。長田氏の大学論に対して不満であれば、自身の名前でもって批判を書くのが当然であるし、そしてこれまでも西川はそうやって論争の場をつくってきたのではなかったか。西川によって書き足された「未来につながる創造的共同体」が何であるのかは明らかではないが、「グローバル化の認識と批判の拠点」は、自身のいる場所にかかわる批判的な検討作業からしか生まれえない。長田氏が述べる「真の競争原理」を導入しようと試行錯誤されるなかで大学院生活を送っていた私からすれば、「大学の可能性」という言葉を繋ぐことは「廃墟」としての大学を覆い隠すことになるのではないか。

「先端総合学術研究科の設置については始めの頃に私も少し企画に加わっていたが、すでに停年を過ぎた私を研究科のスタッフに押しこんだのは長田総長である。先端研には長田さんの学問と大学に対する夢と主張が込められていて、それを具体化するについては渡辺公三さんと事務局のスタッフの血のにじむような、まさに献身的な努力があった。その労苦を少しは知っていたので、何かお役にたてることがあればしてもいいなという気分になっていたことは確かである。しかし出来あがった趣意書には、私の嫌いな公共、共生、表象といった言葉や東大駒場的な用語が散見し、ちょっとした違和感を抱いたことを覚えている。……。長田さんの夢を私なりに一言で要約すれば、優等生ではない、個性的で野性的な、自分で考え行動することのできる若い人材（私の言い方では文明人に対する野蛮人）を集めることであった。それは私学の理想であるが、長田さんの自己像の投影でもある。さらに言えばそれは私自身の大学の理想像と重なるものであった。」西川、同上、p.382

西川が長田氏の文章に継ぎ足した大学の理想に関する言葉は、未来の大学生に向けた言葉かもしれないが、目まぐるしい大学改革のもとで生活をするものにとって納得することは到底不可能である。長田氏の夢を代弁する西川の文章において語られる大学の理想像は、先端総合学術研究科に集まった第一線の教員の方々に魅かれたものの一人として理解はできる。レディングズの指摘のように既に国民国家の文化イデオロギー装置の中心的な役割を果たしていないとされる「廃墟」に「野蛮人」を集めることは何を意味するのか。大学のなかで生活するものが自身のいる場所を議論しようとしたときには、国民国家批判の主張と自身の存在のあいだで大きな矛盾を抱え込むことになる。

4. 国家のイデオロギー装置における「国民化の回路」と「非国民化の回路」

前節で論じたように、国民国家批判の議論を自身が生活する場所で始めたときに大きな矛盾を生じさせる。国民国家論の通説的な理解では、アルチュセールの権力論をもとにした国家イデオロギー装置に大きな重点を置くものであった。しかしイデオロギーのなかに生きる人間の肉体はどうなるのだろうか。

「人はいかにして国民になるのか。このテーマはもう少し関心をもたれてもよいだろう。

……。例えば近代的な時間の支配がもっとも貫徹していると思われる軍隊や工場や学校の場合を考えてみよう。明治初期の軍隊で、農民や商人に軍事教練をほどこすことがいかに困難であったかはすでに知られている。国民化の進んだ第二次大戦の軍隊においても、野間宏の『真空地帯』やその他の軍隊生活を描いた作品が示すように、脱落者や反抗者は絶えないのである。工場の場合も、例えば農村出身の少女たちが製糸工場の規律に耐え、それに慣らされるまでには多くの時間を要したはずである。類似の状況は、東南アジアに進出した日本企業の工場においても観察される。かつて私はタイで食事の時間をたずねたとき、「おながすいたとき」という答えがかえってきて妙に感動したことを思い出す。学校が生徒の管理に成功することは、全体主義的な時代を除けばきわめてむずかしい。「国民化の回路」というテーマはきわめて魅力的であるが、同時にその半面である「脱落の回路」あるいは「非国民化の回路」を考える必要があるだろう。「非国民化の回路」を準備するのは、国民化された身体にまだ残された自然であり、国民国家における相矛盾し相対立する価値の存在である。国民化はいまだに完成はしていないのだ。」

西川長夫「国民化と時間病」『国民国家論の射程』柏書房、1998年、pp.44-45

『国境の越え方』平凡社ライブラリーに所収の上野千鶴子の解説にあるように、「国民国家論」はアカデミズムのなかでは「金太郎飴」として理解されてきた¹¹⁾。ある時期に、フレームとして「国民国家論」を使った研究群が出たことは確かであるが、これらを全て「金太郎飴」として切ってしまうことは、国民国家を発見するまでの一様でないプロセス、そして国民国家批判を經由して出てきた「非国民化の回路」という重要な提起を見逃してしまうのではないだろうか。国民化された身体においても未だ「相矛盾し相対立する価値」が存在することは、大学における研究行為が孕んでいる根源的な矛盾でもある。

「われわれはあらゆる国家装置とイデオロギー装置を通して国家に回収されてゆく。こうしてわれわれが国民国家に回収される無数の回路についていつまでも語り続けることができるでしょう。それこそまさに近代の歴史であり、われわれ国民の歴史でもあるのだから。だが皆さんもお気づきのように、この語りには欺瞞と言ってもよい一つの大きな言い落としがありました。それは、われわれの内部と周囲に張りめぐらされた国家への無数の回路は、それを逆にたどって国家の外に出ることを可能にする回路でもありえた、ということです。回路の中で昼寝をしたり、サボタージュをきめこんだり、小さな爆薬を仕掛けることもありえたでしょう。現にそのような無数の試みや闘争が歴史のさまざまな時点で、さまざまな場所で、意識的・無意識的に行われてきたのです。国民国家は実に巧妙に作られた人工的な機械であり、その強制力は圧倒的ですが、われわれは国家に回収される瞬間においても必ずしも全面的に回収されているわけではなく、なにがしかの違和感や反発を抱いていたのではないのでしょうか。それは大事なことだと思います。」

西川長夫「国民国家論から見た「戦後」」『国民国家論の射程』柏書房、1998年、p.276

国家へと回収される「無数の回路」が、逆にたどることによって「国家の外に出ることを可

能にする回路」でもありえた、という点は国民国家のイデオロギー装置にかかわる議論を次に進める重要な提起である。国家に回収される瞬間に抱く「違和感」や「反発」は、本稿では十分に展開することができないが、西川長夫の私文化論、私論ともかかわる重要な点であるように思われる。以下の引用は、68年という「私」の革命を経験した者の「その後」、についての証言である。

「1967年から69年に至る2年間のフランス滞在を終えて、本務校に帰任したとき、私は教員としてとどまりその職務を懸命に務めるが、いわゆる学界やアカデミズムとはできるだけ距離をとることを決心した。もちろん私は、欧米や日本近代の多くの国民文学を愛読しそれに育てられた世代であり、また大学入学以後は近代のアカデミズムが生み出した偉大な研究に大きな影響を受けている。しかしこうした近代国民国家のシステムの中に位置づけられた作品や研究がもつイデオロギー性や限界もおおのずと明らかである。私はまた自分が生きている時代の中で、最小限どうしても言わねばならぬことは言うべきであると考えた。そのためにジャーナリズムの本流とはできるだけ距離を置くが、その辺境に自分の発言が可能な位置を作りたいと思った。……（中略）。私はどちらかと言えば強健な体格にめぐまれていたのであるが、大学入学時に結核を患い、在学中に左肺上葉の半ばを切除するなどのことがあって、就職は断念せざるをえなかった。反アカデミズム、反大学を唱えながら、結局は大学や大学の友人たちの世話になり、大学の周辺でしか生きることができなかった。忸怩たるものがある。私はこれまで自分の文章の原動力は不正や理不尽なものに対する怒りではないかと思っていた。最後の段階に至っても、悪化の一途をたどる世の中に対して抗議したい気持ちがあり、せめて何か私の存在を記す引っ掻き傷くらいは残したいという気持ちがある。しかし私は同時に、自分の文章がある種の楽天性と幸福感に満ちていることも発見した。」西川長夫「あとがきに代えて」『植民地主義の時代を生きて』平凡社、2013年、pp.579-581

ここでひとつのエピソードを紹介したい。先端総合学術研究科に赴任した西川のもとで博士号を取得された李ハイ蓉さんの公聴会での発言である。短期間で博士論文を書き上げたことに対して、会場にいた教員から西川による指導はどのようなものであったか尋ねられた李さんは壇上で非常に困った笑みを浮かべ、答えに窮していた。そして「西川先生は、指導はないんですね。」と笑いながら発言したことを今でも鮮明に覚えている。私の記憶によるものなので多少の違いはご寛恕いただきたい。しかし、五年一貫制による研究者の養成を目指す先端総合学術研究科における博士論文の主査と学位申請者の関係において、「指導がない」とはいかなる事態をあらわすのだろうか。これは私の場合も同様であり、書いたものを見せ合いコメントし議論する、そして美味しいご飯を食べに行った記憶はたくさんあるが、いわゆる論文の書き方に関して何かいわれた記憶はない。それが幸か不幸かの判断は未だつかないのであるが。

上記の引用は、国家を批判し大学を批判しながら、その場に留まり続けた生が孕む矛盾そのものであり、そこに留まり続けたからこそ発される矛盾にみちた言葉だと思う。肉体に矛盾を抱えこむことは、それ自体が異なるものに自身の体が引き裂かれることである。そして矛盾を

肉体に抱え込む存在だからこそ、そこから脱出する起点を探る行為が生まれる。自分自身が「廃墟」の大学に棲まう矛盾に満ちた存在であることを気づいたときにこそ、「違和」や「反発」の先に「虚偽的」イデオロギーからの脱出の回路が垣間見えるのではないだろうか。国民国家批判と名付けられた西川の一連の作業はこの矛盾を発見し、「廃墟」のなかの「肉体」からそれを徹底的に考えることだったように思われる。「知の生産」と「自己の陶冶」という近代のプロジェクトにおいても、都合のいい人材の育成を語るネオリベラルな大学改革においても、大学における望ましい主体の再生産のプロセスは常に完全なものではありえない。西川が土曜講座の未来として語った「変革の場」の内容は明らかではないが、大学が求める主体になることへの「違和」、そうした主体になり損ねる経験を語ることは始まりとなる。大学という「廃墟」の活用法は、この矛盾に満ちた人の環から発明されるだろう。

注

- 1) 映画『11'09'01/ セプテンバー 11』2002年、所収。このオムニバス作品は、アメリカ同時多発テロ事件とアメリカ合衆国とNATOによるアフガニスタン侵攻を受けて、11人の監督がそれぞれの「9月11日」を11分9秒01の長さで表現したものであり、今村作品はその最後に配置されている。「おとなしい日本人」に登場する復員兵・勇吉は、今村昌平監督『黒い雨』（1989年）に登場する復員兵・悠一とも重なる。この悠一は、井伏鱒二『遙拝隊長』の悠一でもあるが、今村の監督作品『黒い雨』においては今村自身の戦争体験が投影された布団爆弾を抱いて敵戦車にとびこむ元特攻隊員であり、「黒い雨」を浴びた矢須子とともに安住することのない戦後を生きる存在である。「おとなしい日本人」の勇吉を、広島への原爆投下からトルーマンによる朝鮮戦争での原爆使用を示唆するラジオ放送までの時間を描く今村自身の『黒い雨』からの引用とするならば、今村昌平にとっての9.11「テロ」は広島への原爆投下へと重ねられる。黄土色に輝く満月のもとで完全に蛇と化した勇吉は、声ならぬ威嚇音をだしながらスクリーンの「こちら側」を睨みつけ、蛇となるしかなかった戦場の身体へと近づく者に警告する。
- 2) 「野間宏の理論と実作の特色の一つは、個人の肉体に対する執着とその描き方にあると思います。彼はしばしば内的な感覚について語っています。また彼の文体が示しているように、彼は肉体や内部器官によって思考します。それはあたかも真の革命は頭脳のイデオロギー的な変化ではなく、人間の肉体の諸器官や内的感覚の変化であることを主張しているかのようです。じっさい彼は、日本人の肉体は天皇制の抑圧のもとでねじれてしまっていると主張しました。したがって彼によれば真の社会的な解放とは、何よりもまず肉体の解放であり、肉体における根本的な変革を伴わない革命は無意味であるということになるでしょう。」西川長夫『日本の戦後小説』岩波書店、1988年、p.262
- 3) (1) 人間と自然の存在論的区別——少なくともデカルト以来の近代思想に埋め込まれている区別——を拒否することの意味。(2) 国家を唯一の可能のおよび／あるいは第一義的な境界線——このなかで社会的行動が生起し、またこのなかでその分析がなされる——と考えることを拒否することの意味。(3) 一者と多数者、普遍的なものの特異的なものあいだの終わりなき対立を、時代錯誤としてでなく人間社会の永続的特質として受容することの意味。(4) 変化しつつある科学的諸前提の光に照らして信頼しうる客観性の種類。ウォーラステイン『社会科学をひらく』藤原書店、1996年、p.144
- 4) レディングズ、前掲、p.7
- 5) 末川博、細野武男、西村信雄、山口平四郎、藤井松一、川上勉、栗山崇、奥田修三「座談会 土曜講座30年を語る」『土曜講座30年』立命館大学人文科学研究所紀要別冊、立命館大学人文科学研究所、1976年、p.31
- 6) 立命館日満高等工学校については以下の論文に詳しい。隈部智雄・原正敏「戦時下、技術員、技能工養成の諸局面—立命館日満高等工学校」『千葉大学教育学部研究紀要 第2部』41巻、1993年、

pp.121-191 及び、伊藤武夫「日満立命館日満高等工科学校—理工学部前史の一齣—」, 立命館百年史編纂委員会『立命館百年史紀要』2号, 1994年, pp.45-86

- 7) 「理性と同様に、文化は、大学にとって特に統合的機能として働く。ドイツ観念論者にとって、文化は、研究されるべきすべての知識の総体であり、また同時に、その研究の所産としての人格の形成と発達なのである。この文脈において、ベルリン大学創設のためのフンボルトの計画では、大学を国民国家に結びつける文化の理念が大学の中心的理念となる上で決定的な役割を果たす。このことがドイツで起こったという事実は、もちろん、ドイツの国民意識の勃興と深くかかわっている。文化という標題のもとで、大学は、研究と教育という二重の任務を割り当てられる。それぞれ国民的自己認識の生産と教化である。こうして、大学は、理性的国家の国民の精神生活を監視する任を負った機関となり、民族的な伝統と国家主権主義者の合理性を両立させるのである。大学は、別の言葉で言えば、人々の日常生活に理性を与える機関として認識され、同時に、人々の伝統を保持し、フランス革命のような血腥く破壊的な例を見習うことはしないのである。」ビル・レディングズ, 前掲, pp.20-21
- 8) 「21世紀の日本における新しい大学のあり方のイニシアティブを握り得る可能性をもっているのは、私立大学ではなかろうか。まず第一に、私立大学は開学以来、特定の国家やその政策とは一定の距離を置きながら、それぞれの建学理念に基づいて、その志を支援して集められた私的基金と学生の学費でもって、国公立とはひと味違った個性的・創造的人材の育成に一世以上をわたって営々と努力し続けてきた。そのノウハウは、今後の日本の新しい人材育成にとっての貴重なものがある。……。日本社会の最大の問題点は、すべてが「官」主導であり、市民の自発性の弱い硬直した官僚国家であることが最大の問題点であり、それを打開する手段として「規制緩和」の必要性が叫ばれ始めて久しい。しかし、国民がいつまでも「官」=国立崇拜から自由でない限り、わが国の官僚支配からの解放は、建て前はともあれ、実質的な成果は期待できないであろう。なぜなら、このような民衆の間で根強い「官」崇拜の根底には、教育の場における抜きがたいまでの国立崇拜があり、まさしくそれが民衆の「官」崇拜を意識の次元で支える構造として機能している事実である。それゆえ、「民」に依拠する真の意味でのデモクラシーの確立のためには、まず何よりも教育の場における「官」主導、すなわち国立中心主義からの解放が前提とならなくてはならない。」長田豊臣「私の私立大学論」『大学時報』273号, 2000年, pp.12-13
- 9) 立命館の1990年代の大学改革のなかで打ち出された新事業の数々については、中村龍兵『挑戦する立命館—大学改革とは何か』エトレ, 1997年に詳しい。
- 10) 西川長夫『パリ五月革命 私論—転換点としての68年』平凡社新書, 2011年
- 11) 上野千鶴子「解説—「国民国家」論の功と罪」, 西川長夫『国境の越え方』平凡社ライブラリー, 2001年